

Margaret Connolly, John Shirley: Book Production and the Noble Household in Fifteenth-Century England.

Aldershot: Ashgate, 1998. x+247pp.

向井 毅 (鳴門教育大学)

現存する中世写本の書き手は、固有名詞をもって語られることはまれである。本書が扱う John Shirley は、その例外となる一人の写字生である。作成した写本の数、作品編集と写本の編纂ぶり、プロフィールを伝える歴史文書の豊かさなどの点で、その存在の大きさ、持つ意味の深さは他を圧倒している。シャーリーに対し、かねてより評者が寄せてきた関心は次のようなものであった。

第1に、写本編纂は個人的な文学趣味から生まれたものなのか、それとも商業的な営みであったのか。

第2に、どのような経緯でリドゲイトやチョーサーの作品にふれ、著者の特定や執筆にまつわるエピソードを手にいれたのか。

第3に、編者としてテキストにいかなる加工をくわえたのか。

第4に、作品と著者との帰属関係の発達の歴史にあって、シャーリーの編集ぶりをどのように評価し、位置づけるか。また、人に貸しだすことを意識した彼の写本制作を出版活動のさきがけとして考えるとき、後の活版印刷家とのあいだになんらかの類似点、あるいは影響関係をみるのが可能か。

出版史からシャーリーの仕事を俯瞰する第4の問いを除けば、本書は、こうした関心に対して、過去100年の間にモノグラフの形で発表されてきたシャーリー研究の総体を入念に整理・評価してくれている。著者は、シャーリーの理解には文学と歴史の相互に密接な考察が必要不可欠であると強調し、この面から新しい解釈も提示している。15世紀前半の職業書記官による写本制作の実態、作品の伝播、書物の流通、チョーサーやリドゲイトの当代評価とその後の受容などをうかがい知るには、本書は格好の書物であろう。しかし、主たるねらいは「整理と再評価」にある以上、後に続く研究者には、本書を糧になお資料を積みかさね、個々の問題理解を精密化するなり、より大きな観点からシャーリーの活動を捉える試みが求められる。本書は豊かな情報を提供しながら、かつ読者の書きこみを求める研究書であるといえる。

平均寿命が35歳前後と推計される当時において、シャーリーは90年(1366年-1456年)の長寿を享受したことを墓碑銘は記している。このうち実際に作品編集と写本の編纂を行ったのは、60歳を過ぎ、ウォリック伯リチャード・ビーチャムの書記の仕事に暇を得てからのことである。第1章には1420年頃までの彼の歴史上の記録がまとめられている。この記録から読者は、一人の書記官が貴族や宮廷の社会で愛好される文学作品にふれ、自ら作品の収集を行い、そして自前のコレクションを制作するにいたるまでの文学形成期を思いえがくことができる。ウォリック家を中心とした豊かな文学サークルがシャーリー夫妻の目前で展開される姿である。その一例。リチャードの妻エリザベスは、トマス・バークレーの一人娘。バークレー公は、ヒグデンの『ポリクロニコン』とアングリクスの『物性論』の英訳を行ったジョン・トレヴィッサの庇護者であり、エリザベス自身も結婚後、ジョン・ウォルトンにボエティウスの『哲学の慰め』の英訳を依頼する。ウォルトンといえば、バークレー公の庇護下でベゲティウスの『戦争論』を翻訳をした人物である。シャーリー自身は伯爵家の家令にも匹敵する書記としてリチャードに、妻エリザベスは伯爵夫人のエリザベスに仕えたことを考えれば、夫婦そろって伯爵邸内外で、文学の香りに身を浴していたことになる。また歴史文書は、ヘンリー5世のフランス遠征に先だち、ウォリック伯に従ってシャーリーがカレーの防衛

について、ほぼ同じ時期にトマス・マロリーとリチャード・ハルシャムがウォリック伯の指揮のもと同じ任務についていることを教えている。シャーリーは人物紹介をそえてハルシャムの詩を写本に書き写し、マロリーは『アーサーの死』の第7巻でガレス卿の武勇をカレー近くで催された馬上槍試合でのウォリック伯の活躍をふまえて描写している。シャーリーはこの接点からもまた文学的滋養を得たとの楽しい想像をめぐらすことも可能であろう。

晩年、シャーリーはロンドンのセント・バーソロミュー院の敷地に移り住み、4つの店を借りていた記録がある。職業的写本制作の解釈を導く重要な鍵である。Hammond(1899, 1927)や Brusendorff(1925)が都会の大きな写本制作工房を監督する出版業の始まりと述べて以来、シャーリーの写本制作は商業的営みと考えられ、今日もなお Greenberg(1982)や Edwards(1997)の主張の中に生きている。一方、Doyle(1961, 1983)は新たな資料の追加と読み直しにより、バーソロミュー院への転居は家庭的、個人的理由によるとの可能性を導きだし、営利を目的とした出版者像の見直しを求めた。Green(1980)はこの提案を継承して、シャーリーは「退職後の隠せい」のためにセント・バーソロミュー院に居を移し、4つの店は他人に転貸したと推論した。シャーリーの写本制作活動をめぐるこの論争史は、本書に手際よく整理されている。「写本は貸し出され、回し読み」('circulating library')された。しかしそれは友人間の閲覧であり、商業的な貸借行為ではなかった。著者コノリーは Doyle のこの解釈を採り入れる。そして第2, 4, 7の各章で写本の記述・分析を行い、そこから導かれる編纂の特徴と写本の質は「写本の私的貸し出し」像と相矛盾しないと主張して、Doyle が提案する解釈を補強している。

ここで、商業的写本工房の根拠となっている4店舗の借地の件に戻ってみよう。シャーリーが没して20年後の1476年、キャクストンはウェストminster寺院の境内に印刷所を設置した。仮にシャーリーを商業ベースの写本制作(監督・経営)者と想定した場合、メディアは異なるとはいえ、シャーリーとキャクストンとはともに、貴族や富裕な商人階級を対象に主に英語で書かれた書物の出版を始めた起業家であったといえることができる。キャクストンが払った地代は年10シリングである。そしてこの一つの店舗から14年間に100点余りの印刷物が出版された。一方、シャーリーは自身の住居を含め50シリングもの地代を払っている。はたして、写本による出版活動に乗りだしたばかりの起業家がいきなり4店舗もの工房を構えたであろうか。また、シャーリーの回りにそれほどの写本市場が形成されていたのであろうか。疑問が残る。

シャーリーには3つの大部な自筆アンソロジー写本が、BL. Additional 16165、Trinity College Cambridge R.3.20、Bodley Ashmole 59として現存している。いずれの写本もリドゲイトとチョーサーの小作品を中心にした構成である。これら3写本に関する著者コノリーの記述は過去の研究成果をふまえて詳細で、その観察は興味ぶかい。

まず Additional 写本。この写本は1420年代に作成されたもので、別個に作成された3つの部分が後に一つに纏めなおされたコレクションである。トレヴィサ、ハルシャム、ボエティウスなど、ビーチャム家との関係の中から知りえることができた作品が含まれ、シャーリーの前期の自伝が反映している。他の2写本とは異なり、生存中の早い時期にシャーリーのもとを離れて他の人の手に渡り、そのため後のテキスト編集の際にイグゼンプラーとして利用されることはなかった。

次に Trinity 写本。10歳のヘンリー6世がパリで臨時の戴冠式に臨むのに随行して

ウォリック伯がロンドンを留守にした期間を中心に、1430年から32年の2年余りの間に作成された。30年代は、ビーチャム家との関係を中心にしながらも、商人階級の中に交流の輪を広げた時期で、裁判の仲裁人、管財人などにその名をしばしば連ねている。この写本には前後が欠けている。在庫用印刷用紙(paperstock)の観察から、Sion College Arc.L.40.2/E.44 写本とJ. ストウ編集のBL Harley 78の一部(folios 80-3)が元々Trinity 写本の前に収まっていたことがわかる。Trinity 写本それ自体には、リドゲイト、チョーサー、ホックリーブ、サフォーク、シャルティエらの作品を中心に、英語、仏、羅で書かれた短詩だけが集められている。Additional 写本同様、編集途中で折丁の並べかえが行われ、一つのまとまりあるコレクションに仕立てなおされている。

最後に Ashmole 写本。80歳を過ぎた、1440年代後半に作成された。冒頭にある「作品リスト表」が実際の収録作品と異なること、書きあらためられた折丁番号の跡などから、この写本もまた一つのコレクションとして編纂されるにあたり、編集上の組みかえ・再編が施されたことがわかる。しかし先行する2写本とは異なり、機会詩や宮廷風作品が少なくなり、代わって敬虔な調子のものが多くなる。先行写本(特に Trinity 写本とは11篇)の作品の反復採録と宗教的作品への好みの変化には、ビーチャム死後(1439年) 宮廷社会の文学サークルとは疎遠になり、老いゆくシャーリーがセント・バーソロミュー界隈の宗教的環境に身をおく姿が反映している。また、くり返しとりあげられた作品の本文には異同があり、その程度が作品により異なる。使用したイグゼンプラーの違いに起因するのか、イグゼンプラーは同じでも編者としての本文意識に変化が生じたのか、老齢が関与するのか、あるいはこれらが複合的に関係しているのか。

読了後はシャーリーのもとに返却を願う「序文」とともに、ここに示された写本の観察は、著者コノリーの言うように、私的な'circulating library'を示唆している。しかし評者は、さらに進めて、シャーリーの私的な詞華集づくりの中にも職業的書記官の態度や精神を見てとるべきではないかと考える。なるほど彼はそこに好みの作品を集めた。しかしシャーリーのテキスト編集にもっとも顕著なこととして、作者の特定と作詞にまつわる状況説明が書きそえられている。Pearsal(1970)は、リドゲイトの作品決定におけるシャーリーの重要性を指摘した。例えば、'A Mumming for the Goldsmiths of London'のように、唯一シャーリーの情報によりリドゲイトの作品として特定されたものがある。チョーサーについても同様である。写字生アダムの怠惰と軽率を嘆くチョーサーの詩は、皮肉なことに書記シャーリーが、忠実な記録か否かは別として、チョーサー作と特定した上で筆写しなければ後世に伝わることがなかった作品である。さらにリドゲイトには、Additional 写本で特定されたものが、Trinity 写本では取り消される作品すら存在する。個々の作品について正確な情報を入手し、それを添付する。そして回覧された読み手の理解に供する。文学作品編集にとってこのユニークな試みを、職業書記として公的文書を作成したシャーリーの執筆姿勢の連続として捉える視点が大切である。文学を歴史に据えて考察することの重要性を強調する本書には、こうした考察の展開を書きくわえる必要がある。

中世は作者の存在を意識することなく作品が読みつがれた時代であった。創作行為とは過去から継承した題材を書き真似、それらを適宜つなぎ合わせる行為であるとの著作意識は、誤りや表現の稚拙さを読者の訂正にゆだねるという作品享受者のテキスト参加に補完されていた。「間テキスト性(intertextuality)」、「共同体的作者(collective authorship)」、「作者の多様性(multiplicity of authorship)」など今日取りざたされる著者概念が、「著者

の解体」を持ちだすまでもなく、そっくりそのまま適用される時代であったといえる。こうした「開かれた本文」に対し、作品を著者固有のものとして囲い込み、そこに作者の個性、独創性を主張する動きが現れる。近代的な著作意識の芽生え、テキスト占有化、「閉ざされた本文」の始まりである。大陸では、ボッカチオが神の創造力に、ダンテがホメロスやヴェルギリウスら古典作家の創造力に、それぞれ自らの創作力をなぞらえた。イギリスではボケンハムが神の代弁者としての著者意識を放棄し、ガワーが『恋人の告白』に先人オウィディウスと同等の功績を求めた。チョーサー自身も『トロイラスとクリセイダ』がヴェルギリウス、オウィディウス、ホメロスら先人の作品に比肩することをひそやかに望み、韻律の忠実な保持と正確な本文転写を願った。ここに、個性的創造者としての作者の出現とテキスト私有化の芽生えをみることができる。

創作する側のこうした主張は、「モノ」としての作品を制作・出版する側の理解とそれにもとづく活動をともなって初めて確立にいたる。イギリスの出版史上において、作家が植字工らによるテキスト参加を監視し、印刷家と連携をとりながら作品の出版を行った最初の例は、キャクストンの時代を経て、S. ホウズガド・ウォードの印刷所から出版した『美德の範(Example of Vertu)』(1504?)であった。1) 作者が個性的創造力を主張し、2) その名前がテキストと強く結ばれる。そして3) 著者名と不可分になったテキストが印行され、作品というモノとなって出版される。シャーリーは作品に作者の名を冠し、創作コンテキストを付した。組織的な編集としては初めての営みである。編集・出版人としてのシャーリーの活動を著作意識のこうした流れなかで眺めるとき、名前とテキストとを強く結びつけた点で、彼の果たした役割の大きさが現れてくる。フーコーの言葉づかいを借りれば、シャーリーはテキストに著者をもたせ、テキストの流通を制御したりテキストに権威をあたえたりすることを目指す「テキスト指名制」の確立をさきがけたことになる。評者が冒頭で掲げた第4の関心のありかはここにあり、出版史や著作権意識の発展からシャーリーを評価する仕事がまだ手つかずのままに残されている。

一方、テキストを転記する写字生としてのシャーリーは、はたしてどのような本文意識を持っていたのか。これについて本書は、複数の写本で取り上げられた作品の本文に注目して、本文異同の程度とその特質を論じ、ある場合にはその理由を推測している。結果として、最晩年に作成された Ashmole 写本における彼の本文づくりを明らかにすることになるのだが、彼にはダブレットや修飾語句を付加して詩行の意味を「強化と誇張」('intensification and expansion')する特徴があるという。シャーリーのこの「冗長さ」('verbosity')は、フランス語作品を英語に翻訳した過程の中から獲得したもので、翻訳と同じ自由さをもって英語作品の本文と向かい合ったことに起因すると著者は推測している。また、誤読や同一詩行の反復転写の例などもあり、老齢や記憶に頼る筆写態度にその原因を求めている。

リドゲイトの作品を編むにあたり、シャーリーはその本文よりも著者特定と周辺情報の提供に意味があるといわれてきた。しかし、1980年代より新しい写本研究のあり方が叫ばれ、本文の優劣にかかわらず、等しくすべての写本を「社会的な産物」とみなして記述・解釈する方向が示されてきた。本書の記述もそれに沿う一つの試みであろう。本書の一部で扱うには限りがあった。シャーリー写本における本文意識の問題は本書の記述をもって始まりとし、今後は個々の作品毎により詳細な研究と解釈がなされなければならない。その全貌が明らかになった段階で、改めて、「テキスト指名制」への端緒をひらく近代性への方向と中世の写字生の伝統的な本文意識とが交差する地点に立つ

シャーリーの写本編纂活動を観察する必要があるだろう。

本書からシャーリー研究の歴史と最前線を知ることができた。論じられることの少なかつた翻訳家としての彼の仕事ぶりも詳細に述べられていた。テーマを論じつくした論考は、研究途上にある者を著者の持つ満足感にも似た知的な興奮で満たしてくれる。これに対し、本書があたえる知的興奮は前向きのものである。研究の前線に導かれた感謝の上にたつて、読み手が本書から示唆を得てこれから調査探求に乗りだそうとする類の興奮といえる。評者自身が受けた刺激の主なものは既に上に述べた。加えて、翻訳も興味をそそる問題である。翻訳に際し使用したテキストそのものが現存するケースは珍しく、シャーリーの3つの翻訳作品 Le Livre des Bonnes Meurs、Le Secret des Secres、The Dethe of the Kynge Scotis にはいずれもそのイグゼンプラーが特定されている。翻訳に関心を持つ研究者には、願ってもないフィールドであろう。また、シャーリーが翻訳に付した序文とキャクストンが出版物につけた序文との類似性や両者の関連性も是非整理をつけなければならない問題である。本書は豊かな情報を提供しながら、かつ読者の書きこみを求める開かれた研究書であるゆえんはここにある。

[ 参考文献省略 ]